

医事・文談 九百五十七 平岸 三八

《正岡子規(36)の続き》その245
子規と漱石(五十四たび続)

久保より江の夫君・久保猪之吉は、九州帝国大学医科大学の耳鼻咽喉科教授であったことは前述した。同医科大学は創設から明治44年(一九一一年)3月までは京都帝国大学福岡医科大学と称していたのである。

明治七・二・二六、福島県二本松に生れ、昭和

一四・一一・一二没した(1874-1939)。

明治33年、東京帝大医科大学卒。36年ドイツに留学、帰朝後、福岡医科大学教授となった。

ゐの吉(久保猪之吉の筆名)は、高等学校時代から短歌に興味を抱き、明治26年落合直文らの起した浅香社に加わり、のち31年服部躬治、尾上柴舟らと新派和歌の会いかづち会を結成し、ゐの吉は最も熱心に実作に、歌論に活躍した。

しかし大学卒業後は、専門の医学に心を傾けるようになり、作歌から遠ざかった。

ゐの吉が最初に歌の師とした落合直文は、明治の和歌革新の先駆者のひとりであった。多病で明治36年12月16日、転地先の千葉県長者町で死去した。享年43歳。臨終にあたり、夫人、内海月杖、与謝野鉄幹、服部躬治、尾上柴舟、久保より江が枕頭にあつたと、『日本近代文学大辞典』(昭和59年10月、講談社刊)に述べられているから、夫君・猪之吉の多忙に代り、より江夫人が病床に侍ったものであろう。

もうこの年には結婚していたことが分る。当時のことだから、女性の結婚年齢はいまよりずっと早く、明治32年(一八九九)松山から上京して府立第二高等女学校を卒業して間もなく、結婚したものであろう。

猪之吉は大学卒業後は、歌の道から遠ざかったらしいが、次の歌の如きものもある。

「老いたり我を思ふや十年へておもかげうす
すタイムスの水二十年の昔の友は髪おちて尊き
者の相を得たまふ」は、留学より10年後再遊の外

国と旧知の外国の学者の印象であらう。

これらの歌は『現代日本文学全集第三十八篇』(改造社、昭和4年9月刊)に載せるところである。この篇は現代短歌、現代俳句集で、猪之吉は短歌篇に、より江は俳句篇に、夫婦して作品が載っているのである。道は違うが、琴瑟相和していたのではなからうか。処生悪路ではないであらう。

ゐの吉の外遊中、より江は『瑠璃草』という歌集を編んだことが、上述の『現代日本文学全集第三十八篇』の斎藤茂吉述「明治大正短歌史概観」中に見える。若くして才女であったのであろう。

なお、これは余談であるが、明治時代、東大各科(といっても、法、文、医、工、理の5科だけらしい)の対抗ポートルースが熱狂的人気を呼んだらしい。それは学内のそれぞれの科のみでなく、満都の人気をも博したものであった。

それは明治19年、東大を打って一丸とする運動会が生れ、春は向島にポートルース、秋は本郷の運動場に陸上競技が行われた。

初めは法科が強く、医科はなかなか勝つことができなかったが、明治23年医科がはじめて勝った。翌日は学校は休業し、教授以下祝賀会を行ったり、更に祝勝の宴会をするという騒ぎ。

のちには医科はなかなか強く、三連勝をしたことがあるのは、猪之吉の「をととしも昨年も今年も勝関のひびきのなかに散る桜かな」の作で分る。この歌はおそらく、三連勝の喜びと共に唱和されたのであろう。

子規と漱石は、幼少からの友人ではない。子規が上京して東京大学予備門に入学してからで、二人で寄席の話をしたところ、大に共鳴するところがあり、それからの親交である。それは明治22年1月のことらしい。それから互に書いたものを交換して、その文章や才に感じ入り、或は畏友とし、或は千万人中の一人とするなど、互に推重を重ねた。

そろそろ漱石とも別れることにしようと思うが、より江の辞世の句を最後に掲げることとする。別れ路やただ曼珠沙華あるばかり